クローズアップ

Close-UP

女性とオフィスと仕事を考える

e-ビジネスが加速度的に進展するなか、
ますます重要度を高める〝ネットサービスソフトウエア〟。
そんな最先端ビジネスの真っ只中で、生き生きと活躍する女性。
今号は、「ハードな仕事に慣れてしまいました」と
微笑みながら語る広報ウーマンに
職業観とオフィス環境についてうかがった。

ノベル株式会社

マーケティング本部
広報担当 **窪田万里子**（くぼたまりこ）さん

ネットワークサービスのトップブランド“ノベル”

今回“クローズアップ”する窪田万里子さんが勤務するのは、米国ユタ州に本社を置くNovellの日本法人で、ネットワーク関連ソフトウエアの大手メーカー・ノベル株式会社。今日では、日本国内でも数多くの企業が参入し、しのぎ

を削る通信関連ソフト業界だが、かつては“ネットワークＯＳといえばノベル”といわれるほど絶対的なシェアを誇り、同社の製品である“NetWare”を自在に操ることが、すなわちネットワーク･コンピューティングを行うことと同義語とされていた。現在、同社の主力製品は、通信単体から次のステップへと移行し、企業のイントラネットやエクストラネット環境を安全かつ簡易に管理し、e-ビジネス・ソリューションを進化させるディレクトリサービスがメイン。次々に先進的なソフトを開発・製品化し、現在、ユーザー数は全世界で実に7000万人を数え、ディレクトリサービスのリーディングカンパニーとして、確固たる地位を築き上げている。

仕事の醍醐味は リアルタイムのレスポンス

窪田さんは、同社から世界に送り出される製品群のマーケティングおよび広報を担当している。まさに、新製品のスタートラインをプロデュースする重要なポストを担うキャリアウーマンである。

「提供する製品やサービスライン、サポートに関してのＰＲが主な仕事です。具体的には、新製品の発表会の準備・運営からブリーフィング、プレスリリースの制作、マスコミへの取材対応など、業務の内容は多岐にわたります。ご存知のとおり、今、ＩＴ関連業界は、米国、特に西海岸を中心に活発に動いていて、社会からの注目度も高く、一つの新製品、一つのプレス発表がダイレクトに株価に影響します。それだけに、昼夜を問わず流れ込む情報に、常に神経をとがらせていなければなりません」。わずかなミスも許されない、ＩＴビジネスの最先端で生きる彼女だが、最大のポイントは、米国からの情報と国内の状況を統合しながら、全世界とリアルタイムでメッセージングし合うことと言う。

「外資系企業の、コンピュータソフト業界の、そしてＰＲセクションの宿命のようなものです」と笑う窪田さんだが、実際に話をうかがうと、そのタイトな仕事ぶりは、まさに「24時間戦えますか？」の世界だ。例えば、時差の関係で、Ｅメールのやり取りではタイムラグが生じる案件については、深夜２時、３時からスタートする世界各国のＰＲ部門とのテレコンファレンス（電話会議）にもいとわず参加する。もちろん、そんな日の朝からも通常の勤務をこなす。また、米国本社から前触れなく発令されるミッションも多いため、オフィスはもちろん、外出先や自宅であっても、常にネットワークにアクセスできる状態を維持しなければならない。

「広報の醍醐味は、発信したメッセージがダイレクトに市場に反映されることです。練り上げた策に、期待どおりのレスポンスがあった時の達成感は、何ともいえません。ただし、そのために、いつでも、どこにいても時間と仕事に追いかけられる毎日なんです(笑)」。そんな彼女にとって、“オフィス”とは一体どんな空間なのだろうか。

気分転換は他部署への情報収集 休日は仕事をシャットアウト

「モバイルさえあれば、どこでもできる仕事ですが、“城を構える”というか、私専用の椅子とデスクで仕事がしたいですね。最近、フリーアドレス制もよく耳にしますが、当社ではまだ早いかなと感じます。デスクに向かっているときは、電話やメールへの対応で、一時も気が抜けない状態ですが、仕事の合間を見つけて、営業や開発部門などへ情報を集めにでかけます。それが意外にいい気分転換になっていますね。あえて希望を言えば、少しでも外の空気が吸えたり、一人で静かに落ち着けるスペースがオフィス内にあればいいなと感じます」。

休日には仕事をシャットアウトし、「とにかく何も見ない、何もさわらないよう心がけています」と語る彼女。もっぱら、おいしい料理を食べたり作ったり、食材探しに街を歩いたりと、どうやら彼女のリラクセーションは“食”にまつわることが多いようだ。この取材の翌日から、「年に一度の長期休暇で、南の島へ出かけ、のんびりとした時間を過ごします」と笑顔で語ってくれた彼女。ぜひとも南の島へはモバイルコンピュータを持参せず、仕事から解き放たれ、おいしい料理と静かな自然に囲まれた時間を堪能してきて欲しいものだ。